

# ほふたえ

鶴岡発

絹のみちしるべ

羽前絹練通信

創刊号 2015・夏号

The road to Silk・Uzen Kenren



精練工程の仕上げ 手洗いの様子



熱気と湿気が充満する作業場

## おらだの 仕事場

※「おらだ」は、「俺たち」を表す庄内の方言。

## Vol.1 精練

大釜から湯気がたちのぼる作業場



作業場は熱と湿気で充満している。特に夏場は

100年を超えて培われてきた伝統の技術が生み出す気品ある光沢と滑らかな風合い。ここには、汗にまみれた職人たちの誇りと熱意が染み込んでいる。



綿密に時間管理された熟練の作業

黙っていても汗が噴き出してくるような暑さである。そんな職場で社員たちは黙々と、そしてキビキビと仕事をこなしていく。大釜には95℃の温度に設定された洗剤入りのお湯がたっぷり用意され、まるでゆつたりお風呂にでも浸かるかのように生地が入れられていく。わが社では、昔ながらの石鹼練りを守っている。他の洗剤より時間はかかるが、絹がしっとりなめらかに仕上がるからである。

**繭** からとったばかりの繊維はごわごわしている。それはセリシンという蛋白質がついているから。美しく柔らかく光沢のある絹の生地を作るためには、そのセリシンを取り除く必要がある。そこで絹を煮てセリシンを溶かし出すという作業を行う。それが、「精練」と呼ばれる作業である。精練の準備工程として、まず生地をロールケーキ状に巻いて吊る。それを大きな釜に入れて煮る。当然、

釜に入れた後は、練りムラを調整するため時折人力で布を揺らす。これも力のいる仕事だ。徐々に水温を下げた別の釜に移し替えながら丁寧にゆすぎ、セリシンや不純物、洗剤をきれいに落としていく。そして仕上げに35℃〜40℃の水でしっかり手洗いしてきれいに汚れを落とす。



仕上げのゆすぎは手洗いで



光沢の美しい完成品

地道な作業だが、確かな品質の絹を作る上で絶対に欠かせない大切な仕事である。

## おらだの職人さん Profile ①

加工のほとんどが手作業に近く、常に誰が作業しても同じ品質、レベルの加工を行うことは難しい。それだけに、限られた釜で優先順位を付け、時間を読んで作業がこなせた時は喜びを感じる。今後は先輩達が築いた技術を次代へ伝えていきたい。



練染課  
**遠藤 努**  
(平成6年入社)

### 特殊加工業務の主要な内訳

- ・オパール加工・樹脂加工・毛焼き加工
- ・オイリング・スリップ止め・ピーチ加工・柔軟加工
- ・UVカット加工・防燃加工・撥水加工・抗菌加工
- ・糊抜き加工・色止め加工 など

お気軽になんでもご相談ください!





はぶたえ

## 創刊のごあいさつ

羽前絹練株式会社

代表取締役 **阿部 純次**

弊社は1906年(明治39年)、「羽前羽二重精練」といわれた精練加工技術のもとに鶴岡絹織物産地の中核企業として発足して以来、激動する時代の波を乗り越えながら、100年有余の伝統と歴史を刻み、現在絹織物の加工における洋装分野では日本一の加工高と生産量を上げています。

このたび、弊社の企業理念や業務内容、また絹織物に関する知識、拠点である地元鶴岡などについてご紹介したいと考え、「はぶたえ〈鶴岡発〉絹のみちしるべ」を発刊いたしました。弊社をご理解いただく一助としてご愛読いただければ幸いです。

**鶴岡**の絹産業は、享保年間(1716~1735)に、九代藩主が京都西陣から技術者を招き、機織りが行われるようになったことが始まりと伝えられている。(鶴岡市史より)

その後、鶴岡の絹産業が発展した背景には、幕末の複雑な藩の事情が反映されていた。慶応4年(1868)に戊辰戦争で降伏した庄内藩は、多くの士族たちが職を失い、新たな生活の道を啓くことが求められていた。そこで、新政府の生糸立国という殖産興業政策に応じ、藩伝統の報恩・徳義精神の再興を図るものとして開墾事業による養蚕業の振興が進められた。まさに「刀を鋏に持ち替えた」多くの旧藩士たちを中心

に大規模な開墾が行われた。明治5年、鶴岡市東部の試験開墾に成功、その後、月山麓の原生林が拓かれ、現在の松ヶ岡開墾場が整備された。明治7年(1874)に桑園造園完了、翌年、桑葉を収穫し養蚕を開始。同10年(1877)まで10棟の大蚕室が建設され、製糸も開始された。



明治以来、絹織物産業が発達した鶴岡の街並(手前:弊社工場、遠方は金峰山と母狩山)



松ヶ岡開墾場に残存する大蚕室の建物(明治期、10棟の大蚕室が建設された)

絹のみちしるべ

1

# 鶴岡シルク ことはじめ

先人たちのたゆまぬ努力と伝統が紡いできた鶴岡絹産業の系譜。  
現在、絹織の一貫生産工程の全てが揃う全国唯一の地域である鶴岡。  
その歴史のはじまりをめぐる物語。



往時の面影を今に伝える松ヶ岡開墾場

明治26年(1893)、絹織物業の振興を目的に「鶴岡絹織会」が発足。機業の先進地である福井、京都、桐生などを視察。羽二重技術や精練技術を習得していった。

羽二重とは、通常の平織りが緯糸と同じ太さの経糸1本で織るのに対して、経糸を細い2本にして織る技法の事で、柔らかく光沢のある布に仕上がるといふ特長がある。

製織の「機場」とともに「練場」と呼ばれる「精練工程」も発展した。精練とは、繊維に含まれるセリシンと脂肪などの雑物を除去する工程で、絹を滑らかに仕上げ品質を高める上で欠かせない工程で、酒造業者の酒釜を借りて精練したのが羽前羽二重精練の起源といわれている。(次号に続く)

参考文献:金屋・風間創業二二〇年史



観光・風土・自然・味覚



## 映画「蟬しぐれ」 ラストシーンのロケ地 丙申堂

明治29年、地元の豪商風間家7代当主が建てた住居兼店舗。約4万個の石を乗せた石置屋根が特徴的。映画「蟬しぐれ」のラストシーンが収録され、藤沢周平文学の愛好者の人気観光スポットでもある。

(弊社の関連会社である公益財団法人 克念社が管理・運営する国指定重要文化財施設)

## 夏に大人気の「おやじ」を意味する絶品枝豆

### だだちゃ豆

庄内の方言で「一家の主、おやじ」を表し、その昔、殿様に献上された際、あまりの美味しさに「どののだだちゃが作ったものだ?」と唸った逸話からその名がつけられたという。全国的に人気の特産の枝豆。



弊社表玄関



## 羽前絹練株式会社

〒997-0044 山形県鶴岡市新海町2-1-1  
TEL:0235(24)1300 FAX:0235(24)1302  
e-mail mail@uzen-kenren.co.jp  
URL <http://www.uzen-kenren.co.jp>